



[平成 30 年 8 月 8 日 定例会発表要旨]

お口は命の入口、心の出口

木の実歯科 院長 蓑輪 隆宏 氏

心身が健康で 幸せになるために

お口は「食べること」「喋ること」「味わうこと」「呼吸をすること」など、人間が生きていくうえで欠かせない器官です。

そのなかでも食べること、味わうことは生活の質を上げるためにとても重要な部分ですが、この機能、感覚を維持していくには歯が必要です。歯があることで食物を咀嚼（噛み砕く、噛み切る）することができ味わうことに繋がります。もし歯を失ってもそれに代わるブリッジ、入れ歯そしてインプラントなどの治療がなされれば良いのです。

歯の本数で 病院や薬局にかかる医療費の違いがあることが、各地の調査で分かっております（グラフ参照）。歯の本数が多い人は医療費が少なく、歯の本数が少ない人は医療費が高いという結果になりました。よって、歯を失う原因となる虫歯や歯周病などをしっかりコントロールすることが身体の健康に繋がるのです。

また、「喋ること」も大切な機能のひとつです。大事なことはその人がどんな言葉を口から発しているか（喋っているか）だと思います。言葉は最も「心」を表します。肯定的な言葉、否定的な言葉、

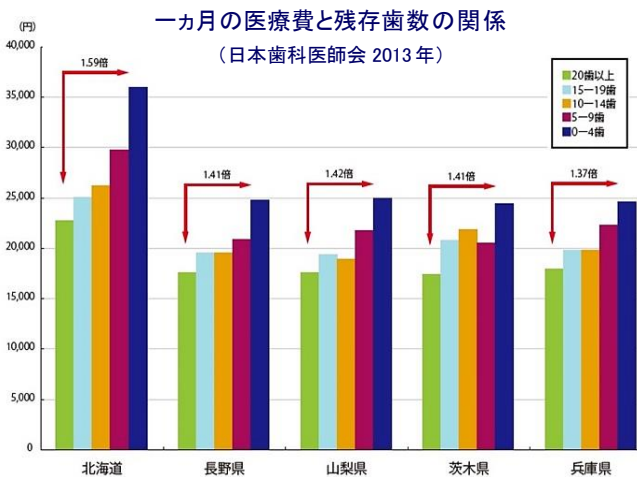


愛ある言葉、そしてその逆の言葉といろいろありますが、どんな言葉を発するかで、周りの人との関係はもちろん、自分との関係も変わってきます。

人間の成功も失敗もほとんどが人間関係で決まるといわれておりますが、この人間関係を左右する言葉に気をつけたいところです。一度口から出た言葉は回収できません！

身体にとっていい命をいただき、心にとっていい言葉を発し、心身共に健康になることが本当の幸せなのではないでしょうか。

皆さん、お口を大切にしましょう！



富山から軽川へ…手稲「みのわ」の激動の歩み

今から 123 年前の 1895 (明治 28) 年、私の曾祖父の初代 蓑輪早三郎が、富山県西砺波郡蓑輪村 (現在の小矢部市) から渡道しました。小矢部川から小舟で伏木港に上がり、そこから北前船で小樽に渡り、汽車で軽川駅頭 (手稲駅) に立ったのが、早三郎 26 歳の時でした。そして空き家を借りて三文雑貨屋を開いたのが、『蓑輪商店』の始まりです。

軽川大火など三度の火事に遭い、その都度、店が灰となり全てを失うこともありました。富山のお国衆などの力で持ちこたえました。それに加え、北海道造林合資会社 総支配人の近藤新太郎氏が取引をしてくれたことも店の将来にとって大きなことだったようです。

続いて、日本石油株式会社 軽川製油所の開設で石油・ガソリンの特約店契約も交わされ、店は順調に発展していきます。いろいろな苦難に接し店を閉じることを考えた時期もあったようですが、その都度、周りの人たちに助けられ何とか店を残しました。そして1926（大正15）年、初代 早三郎は心臓を患い北海道での波乱万丈の30年を終えます。



初代 蓑輪早三郎



二代目 早三郎

その後、初代 早三郎の二男、常治が二代目 早三郎を襲名し、店の代表者となります。

時は昭和に入り世界的にキナ臭さが増すなか、1935（昭和10）年、手稲鉱山はそれまで広瀬省三郎氏が掘り出していたものを三菱鉱業が買収し、本格的に金や銅を産出することになります。それにより手稲の人口も増え、商人も大いにその恩恵を受けたようです。



1907(明治40)年頃の「蓑輪商店」

しかし良いことは長続きしません。それまでお世話になった、一番の取引先である北海道造林合資会社が王子造林になったこともあり、蓑輪商店は倒産に追い込まれます。よって1937（昭和12）年の暮れと翌年の正月は店を開けることが出来ませんでした。船木旅館（現在の手稲ステーションホテル）の船木家の皆様や 〇 古谷商店のお力添えで店は復興の道を見出しますが、世の中は太平洋戦争へと向かいます。二代目 早三郎は手稲駅前に商業組合を設立し、統制経済に突入した配給品配分に奔走しました。



1955(昭和30)年11月 ガソリンスタンド落成式

そして終戦後の1947（昭和22）年、二代目 早三郎は村議会議員から手稲村長となり、1951（昭和26）年に手稲村から手稲町へ移行、1967（昭和42）年に札幌市と合併するまでの20年間、村町政に携わりました。大火で何度も町の財産を失う苦い経験から手稲の小中学校にプールを作り、子どもの泳ぐ力を伸ばすだけではなく 巨大な防火水槽としての

の役目も果たしたことを多くの方々から聞いております。そして、手稲山を抱える町長として「札幌オリンピックを成功させるために合併する」と、生前、私に言っていたことを思い出します。

その後、1955（昭和30）年、私の父、淳がガソリンスタンド（モービル石油）を任せられました。ここが私の生家となり、父、母、弟と小学校1年生まで過ごしました。砂利道だった国道のほこりとガソリンとオイルのにおいを今でも憶えております。

なお、手稲駅南口にある『水車』というお餅屋さんが蓑輪商店の精米技術を受け継ぎ、123年の歴史を今に繋いでおります。

渡道四代目の私は、現在、西宮の沢地区で弟と歯科医業と歯科技工を生業としておりますが、これからも先祖の想いを引き継ぎ、手稲に貢献していく所存です。



明治期築の精米所の全景／1965（昭和40）年撮影＝手前に軽川

※参考：蓑輪商事株式会社「創業80周年記念小誌」、蓑輪商事株式会社「おかげさまで創業100年」、蓑輪勝彦「鎮魂歌」、手稲郷土史研究会「手稲歴史年表」、手稲連合町内会連絡協議会ほか「手稲開基110年誌 手稲の今昔」。

次回予定 ⇒ ①「新川ルネサンス～新川を北海道遺産登録へ」渡部孝次（手稲郷土史研究会 会員）②「手稲の古文書を探す」沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会員）／10月10日（水）18:15～／手稲区民センター 3階 視聴覚室

● 歴史随想 『大樹は見ていた』②

山口運河沿いの大樹

手稲郷土史研究会 会員 村元健治

山口運河、正式名「茨戸・銭函間運河」は、その完成から120年を超える。現在、札幌市内で運河と称されているところは、本運河しかない。20年ほど前から地域の人達が、この運河のことをもっと知ってもらおうと、『山口運河祭り』を毎年9月の第1日曜日に実施してきている。おかげで、かなり運河の存在が一般にも知られるようになってきた。

ところで、この山口運河沿いには、ニセアカシアが植栽されているが、それらの中に1本、ニセアカシアではないヤナギと思われる大樹がリニューアルした運河の樹林散策ゾーンの「運河橋」の近くに存在している。太さ1.5m前後、高さ10mほどの大きさの樹で、他の樹々を圧倒している。樹齢は少なくとも100年は経っていると思われるので、多分、運河ができた頃から存在しているのだろう。そうすると運河とともに、今日まで生きてきたことになり、運河の栄枯盛衰をじっと見つめてきた“生き証人”とも言えよう。

この運河の名称は、山口地区を通過しているゆえ、地域の人達から呼ばれたことによる。したがって茨戸の方では「茨戸運河」、銭函では「銭函運河」と呼ばれた。

山口運河は明治28(1895)年、石狩茨戸から小樽銭函にかけて掘削が開始された。設計者は“石狩川治水の祖”と呼ばれた岡崎文吉。排水とともに運河の役割で期待されたのが、道路の未整備等により問題を抱えていた陸運に替わる運輸航路としての舟運だった。この運河は明治30(1897)年頃に竣工し、銭函から札幌の大通まで「創成運河」(創成川を運河として改修したもの)を併用しながら運行した。物資は約8時間もかかって運ばれたが、それなりに利用されたという。

しかし、問題は運河への土砂の流入だった。砂地地帯をほとんど人力で掘削したため土砂流入は避けがたく、工事中はもちろんのこと、完成してから一番の問題となり、常に浚渫しゅんせつが求められた。



山口運河沿いの樹林帯

大正時代に入って山口運河では、地域の青年団がニセアカシアを植栽するなどの対策を講じたが、土砂流入を完全に食い止めることはできなかった。これら流入問題と、この後、急速に整備されていった道路や鉄道など陸運の充実により、舟運としての運河の寿命は完成後7年ほどで終わってしまった。

しかし、青年団が植えたニセアカシアは今なお健在であるだけでなく、その前から自生していたと思われる運河沿いの大樹もまた、運河の栄枯盛衰をじっと眺め、生き続けている。

TOPIX

「旧三菱鉱業寮」リニューアルオープン

「手稲鉱山」などを経営していた三菱鉱業によって昭和12(1937)年頃に建てられた「旧三菱鉱業寮」(中央区北2条東6丁目)の改修工事が終了し、見学が再開されました。往時の民間企業の厚生施設が現存する例は珍しく、産業史や文化史の面からも価値あるものといえるでしょう。建物はモダンな意匠が随所に施され、昭和初期の洋館の魅力を味わえます。喫茶室も新設。「まちの図書室」には、手稲郷土史研究会発行『手稲鉱山の思いを語る』が配架されています！

隣接する道指定有形文化財「旧永山武四郎邸」の見学と併せて、ぜひ足を運んでみてください。

館内で閲覧できる『手稲鉱山の思いを語る』→



「手稲区歴史ガイドマップ」の改訂に協力しています

手稲区では、区内の小学校4年生が地域の歴史を学ぶときの手掛かりとなることを願って、『手稲区歴史ガイドマップ』を発行・配付しています。

手稲郷土史研究会の協力により平成21年3月に初版を刊行。平成24年、平成27年と改訂を重ねてきました。今年、3回目の改訂期を迎えることとなり、手稲区地域振興課からの協力依頼を受けて、当研究会の理事会がお手伝いをしています。

改訂の趣旨は、「掲載の歴史遺産について現存しているか否かの確認。もう歴史的役目を終えて削除してもいいものはないか。ぜひ加えたい歴史遺産はないか。解説の標記に訂正や付加することはないか。写真等でよりふさわしいものがあれば提示してほしい」ということでした。

この三年の間に、手稲水防倉庫跡（手稲本町2条4丁目）にあった「防火の樹」が切り倒されていたことを確認しました。そして8月には、地域振興課との打ち合わせ中に「竹内農場ゆかりの馬頭観世音菩薩がなくなっているらしい」との情報が入りました。驚いて現地（前田7条11丁目）へ行ってみると、



前田にあった「馬頭観世音菩薩」
（手稲区 HP より転載）

6月に存在を確認したはずの慰霊碑は、台座だけを残して撤去されていました。その後の調査で「馬頭観世音菩薩」は しんかわこうたい 新川皇大神社（北区新川3条13丁目）に移設され見学できることがわかりましたが、元の所在地は今では台座も取り払われてしまい、牛馬と共にあった先人たちの暮らしを偲ぶよすがはありません。

歴史と共に生きた証人は亡くなります。歴史を証明する遺産はこのような消えていきます。今更ながら、記録することの大切さを思い知らされました。 永井道允（手稲郷土史研究会 会長）



手稲水防倉庫跡にあった
「防火の樹」
（手稲区 HP より転載）

★「勝手にしゃべり合う会」へのお誘い 研究熱心な諸氏が集う手稲郷土史研究会では、定例会での発表もより専門的かつ高度な傾向にあるようで（？）「質問はと言われても難しくて…」との声も時折聞かれます。そこで、一ノ宮博昭会員・沖田紘昭会員・濱埜静子会員・乙黒通子会員 が世話人となり、フリートークの場を別途設けることにしました。手稲の歴史や自然、気になるまちのできごと、子どもの頃の思い出話など、気軽におしゃべりしませんか？ 年内は、9月28日（金）、10月26日（金）、11月30日（金）のいずれも午後2時からを予定しています。会場は「ていねコミュニティカフェめりめろ」（手稲本町1条3丁目 メディカルスクエア手稲2階）、参加費としてワンドリンク（200円）を注文していただきます。なんでもありの“漫談会”にどうぞご参加ください。



★第二回「新川フットパス&川下り」は中止となりました 9月8日（土）に予定されていた『新川フットパス&川下り』（手稲郷土史研究会・新川流域を楽しくする会共催）は、6日未明に発生した「北海道胆振東部地震」の影響を考慮し、中止いたしました。なお、今後の開催は未定です。

★原稿募集中！ 小紙「歴史随想」コーナーに掲載の原稿を募集しています。郷土史に関する研究文や随筆などをお寄せいただける方は、手稲郷土史研究会定例会時に編集担当（菅原）までお知らせ願います。11月以降、適宜ご紹介させていただきますのでよろしくご協力ください。